

学習者のウェルビーイングからみる持続可能性と それを支える国際 ESD ネットワーク

丸山 英樹
齋藤 有香

1. 課題と研究目的

持続可能な開発目標（SDGs）は、それまで開発途上国を主たる対象とした「万人のための教育（EFA）」目標¹やミレニアム開発目標（MDGs）²などのグローバル・ガバナンス同様、それが設置された2015年以降、欧州やアジア地域など、よりリージョナルなガバナンスの影響を受けながら、国際的に大きな流れを作っている（黒田 2016）。日本国内でも、政府によるキャンペーンの他、経団連は企業行動憲章を改訂し SDGs 達成に協力する姿勢を示す³など官民連携が目立つ。従来は国際開発とは無縁と思われた業界も SDGs に関わるようになった。例えば、最大規模の娯楽ビジネスである吉本興業による広告⁴や女性若年層に影響を持つ東京ガールズコレクションによる告知活動⁵などの SDGs 関連企画が展開された。こうした動きは広く一般に SDGs への認知を高め、裾野を広げる効果を持つが、そこではあくまでも情報を持った者が教える「上から与える」アプローチが取られている。

上記のような国連などが推進する国際イニシアチブは、日本国内ではしばしば一部の個人や団体の活動である、または国内の問題とは無関係なものとして完結することがあった⁶。最近の教育分野の例としては、持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development: ESD）がある。日本政府からの ESD の提案が国連総会で賛同を受け、その後 UNESCO が中心となり2005年から2014年まで世界的に展開した「国連持続可能な開発のための教育の10年」では、文部科学省、環境省、経済産業省、外務省が協調して様々な活動を促進したにもかかわらず、国内の学校では一部の教員が扱うに留まった。その「10年」を終えて今も継続される ESD は、社会変容のために学校や教育内容を包括的に改善する必要があるとされ⁷、SDG 第4目標に組み込まれたように、国際社会において引き続き重要であると明確に共有されている。

しかし、日本国内では学力低下や教員の多忙化などの問題が重視される中、そうした国際イニシアチブが自分たちの生活と直結していると思われない限り、優先される可能性は低いと

1 初等教育の完全普及、男子と女子の就学格差の解消、成人識字率の上昇など教育に関する国連による国際目標群で、1990年に設置された国際イニシアチブ。2000年に見直され、再び国際目標を設置した。2015年には各目標の到達度が最終報告された。現在は SDG 第4目標に引き継がれている。

2 2015年を達成目標年として2000年に設置された国連による国際イニシアチブで、8つの大目標を掲げた。教育は第2目標として扱われ、主に初等教育の完全普及が目指された。2015年には SDGs に統合された。

3 <http://www.keidanren.or.jp/announce/2017/1108.html?v=p> (2018/10/31 閲覧)

4 <http://www.yoshimoto.co.jp/sdgs/> (2018/10/31 閲覧)

5 <https://www.w-tokyo.co.jp/news/news33.html> (2018/10/31 閲覧)

6 例えば、2005年から話題になった「ホワイトバンド」は、発祥の地イギリスでは貧困に関する政策変更を求める運動だったが、日本国内では「ほっとけない世界のまずしさ」という一時的なブームであった。他に、国連による識字率向上を目指した「国際識字の10年（2003-2012）」は、日本では一部の活動にとどまった。

7 UNESCO (n.d.) . *RoadMap for implementing the Global Action Programme on Education for Sustainable Development* <http://unesdoc.unesco.org/images/0023/002305/230514e.pdf> (2018/10/31 閲覧)

いえるだろう。誰一人として取り残さないことを掲げた SDGs⁸ も一時的なイベントとして捉えられたまま、同時にその間、グローバル化による貧困や暴力に関わる諸問題は「上から与えられる」学習トピックとして消費されるだけで終了年の 2030 年を迎えかねない。したがって、SDGs 時代における ESD 実践では、様々な課題と自分自身との関連性を捉え、自分たちの生活を捉え直し、選択し、行動にうつし、時に新たな価値創造が必要といえるのである⁹。

こうした背景から、教育分野における SDGs の課題とは、国際イニシアチブを学習者がどのように自らの課題として捉えるか、またそうした学習プロセスを支える具体的な教育プログラムには何が求められるか、という点にある。そこで、本稿では、SDGs に関する教育を実践するユネスコスクール・ネットワークのうち、約 30 年にわたり継続される国際 ESD 実践ネットワーク、「バルト海」プロジェクト (the Baltic Sea Project: BSP) を取り上げ、学習者自身のサステナビリティ (持続可能性) に関する変容および教育プログラムの継続性を記述することを目的とする。次節では、個人の持続可能性をウェルビーイングから示し、BSP の教育プログラムの特徴を確認する。続いて、研究方法および著者らが BSP の実践現場において行った参与観察ならびに質問紙調査について記した後、それらの結果を分析する。

本研究の結果から得られた示唆とは、自己と他者を元気づける国際 ESD ワークショップには、学習者個人が「持続可能な開発」という曖昧な概念を自身の抱える日常的な課題と接続させる機会が求められ、特に自身のウェルビーイングに着目することで世代や国を超えた共通知識を生み出し、他者と共有するための行動を起こす可能性がみられることである。また、そうした学習活動を支える継続的な ESD プログラムでは、ボトムアップ型の取り組みを維持し、かつ時代や環境の変化にも対応する柔軟性を伴う特徴も挙げられる。

2. 個人のウェルビーイングと国際 ESD ネットワーク

(1) 持続可能性としての個人のウェルビーイング

「持続可能な開発」の定義が国際的に共有されるようになったのは、1984 年に国連に設置された環境と開発に関する世界委員会による 1987 年の報告書『地球の未来を守るために (原題: “Our Common Future”)』がきっかけであった。その定義とは「将来世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日世代のニーズも満たす開発¹⁰」であり、169 のターゲットからなる 17 の国際目標を掲げる SDGs も、この定義を踏襲している。特定領域の投入に対する短期的リターンを主に追求する発展観とは異なり、ここでは次世代のことを想定する時間軸と、分野横断的あるいは包括的な課題意識が重視されていることがわかる。ただし、この時間軸と包括的視座は、個人には大きすぎて扱うことが難しく、時には無力感さえ生み出すかもしれない。

しかし、生涯学習者である私たちは他人から正解が与えられるまで待つのではなく、身近な周辺課題や自分自身の抱える課題と関連づけて捉えることにより、時間軸と包括性をより扱え

8 EFA は 30 年弱、MDGs は 15 年かけて展開されたが、すべての目標が達成することはなかったことから、SDGs は達成できる目標とすべきという議論もあった。しかし、最終的には理想目標を掲げ今日に至る。

9 田中 (2016:ii) も記すように、SDGs を自分事として捉えることが重要である。この点は教育を扱う SDG 第 4 目標の中でも、指標化が困難とされる項目 4.7 に強く関連する。項目 4.7 については次を参照。<https://sustainabledevelopment.un.org/sdg4>

10 <http://www.un.org/documents/ga/res/42/ares42-187.htm> (2018/10/31 閲覧)。なお、この定義の和訳については、外務省 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/sogo/kaihatsu.html>) などで「能力を損なうことなく (without compromising the ability of)」が抜け落ちているという重大な問題が存在する。

る可能性を持つ。例えば、思春期の若者にとっては一般的に大切とされる二次方程式で正解を導く学習よりも、自分の大きな関心ごとである自己同一性や交友関係についての問いの方が重要な課題となりうる¹¹。本稿の第一著者は発展途上国における国際協力事業に従事しながらも、自らの日常生活を維持できないと他者や周辺環境への配慮が至らないという経験を持つ¹²。つまり、学習者個人が「現実的に達成可能である、実際の良い状態 (Well-being、以下ウェルビーイング)」であること¹³が、他者とともに持続可能な開発を考えることのできる前提となる。

このことは、既に国際機関をはじめ先行する研究でも指摘されている。持続可能な開発を測定するタスクフォース (Task Force for Measuring Sustainable Development: TFSD)¹⁴ はウェルビーイングと持続可能な開発を接合させ、経済開発機構 (OECD) は 2011 年から行うウェルビーイング調査の結果を 2 年おきに報告しており、また SDG 第 4 目標の教育指標にも用いられる OECD-PISA¹⁵ の一部ではウェルビーイングに関する調査を継続している。国際機関は、政策策定者が意思決定する際に頻繁に参考にすべき伝統的な開発指標から誰が抜け落ちているのか、人の人生におけるどの側面が抜けているのかを問うようになったのである (OECD 2017a:5)。OECD の報告書 (2017b) は、ウェルビーイングを 4 分野 (心理的、認知的、社会的、物理的な側面) からなるものと定義しており、しかしながら日本では「(応用力としての) 学力」として理解される認知的側面についてはその関係が小さいことも指摘する。また、概念枠は何世代も超える想定ではないが、現在と将来という時間軸を用いて、現在のウェルビーイングとして物質的な生活条件¹⁶および生活の質¹⁷を示し、将来のウェルビーイングとして資源¹⁸による影響を挙げる (OECD 2011; 2017a)。OECD 調査は大規模ゆえに個別の特異性などが抜け落ちていたり、誤訳などの課題があるものの¹⁹、基盤となる研究概念は生涯学習者である個人の発展とより良い社会の構築を大目標に掲げ、世界の多くの国から研究者が関与し整理されたものである²⁰ため、本研究でも重要な先行研究として捉える。これらのことから、国際機関によるウェルビーイング研究には、過去 30、40 年の間に極めて多くの人を取り残してきたことをふりかえった上で、社会および個人の持続可能性にはウェルビーイングが重要であること、しかし応用力などの個人の学力とは直接関係がないことを示すことがわかる。

大規模調査ではないが、個別の研究も学習者のウェルビーイングを捉える際に重要な内容を示すものがある。小学生を対象にした White (2011) は英国の状況をもとに幸福度と関連させ、

11 ノディングズ (1992=2007) はケアリング概念を用いて、学習者の強い学習ニーズに対応し切れない学校の限界的な課題を指摘する。

12 例えば、水道が無いため雨水を収集し日常を過ごす現地の生活に不慣れな短期滞在者として、自らの健康を維持して生活することに時間をかけ、国際協力へかける時間は限定的になった。

13 詳細は Sen (1999) と米原 (2016) を参照。Sen の研究は OECD 調査の概念構築で重要な位置を占めた。

14 2009 年、国連欧州経済委員会 (UNECE)、欧州統計局 (Eurostat)、OECD が共同で立ち上げ、持続可能な開発を測定する概念や測定方法などを開発してきた。

15 Programme for International Student Assessment は、日本では「生徒の学習到達度調査」と訳される。教育学研究において PISA が生み出す副次的な影響に対する批判も小さくないが、その本来の調査目的は政策分析にあり、測定では何重にも確認作業が伴う特徴を持つ。詳細は、丸山英樹 (2016) 「国際イニシアチブと学力観が描く市民像」佐藤学他編『グローバル時代の市民形成』(pp.45-72) 岩波書店を参照。

16 収入、仕事、住居など。

17 健康、労働・生活均衡、教育、社会的接続、市民的関与、環境の質、個人の安全、主観的ウェルビーイング。

18 自然、人間開発、社会関係資本、経済資本など。

19 誤訳の課題は次を参照。丸山英樹 (2012) 「ユニセフが捉えた先進国の子どもの幸福度」『教育と医学』2013 年 01 月号 :4-10。

20 例えば、DeSeCo 「コンピテンシー定義と選択 (Definition and Selection of Competency)」は、個人の成功と良く機能する社会のために必要とされる能力 (とその可能性) について整理した概念である。詳細は OECD (2003) . *The Definition and Selection of Key Competencies* および Rychen, D.S. & Salganik, L.H. eds. (2003) . *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society* を参照。

学校においては批判的ふりかえり、意思決定とリスク管理、そして他者との関係構築を整理している。子どもの発達段階に関する指摘が多いものの、学習者自身がふりかえる必要性および他者との関係性を重視している。Cowie ら (2006) の研究は、学校教師の立場から生徒のウェルビーイングを捉え、生徒の問題行動の解決につなげるものである。本研究が対象とする BSP 参加者のうち生徒との年齢層は一致し、また参加教員への示唆も含まれる。教員など成人の教育関係者を対象とした研究では、具体的な状況と反応を中心に扱う Holmes (2005) のワークブックがあるが、ウェルビーイングの物理的、感情的、心理的・知的、霊的側面のうち、霊的なものの以外が妥当だと本研究では捉えた²¹。

(2) 「バルト海」プロジェクト (BSP) とは

本研究が着目する教育実践の場、「バルト海」プロジェクトとは何なのか。まずは世界でみられる共通の活動からみてみよう。学校を中心に ESD 実践を主導するユネスコスクール・ネットワーク (UNESCO Associated School Network: 以下 ASPnet)²² は、UNESCO 関連の学校教育活動の中で最も長い歴史を持つ。ユネスコスクール公式ウェブサイトと日本 UNESCO 国内委員会²³によると、ASPnet は UNESCO 憲章に示された理念を学校現場で実践するため、国際理解教育の実験的試みを比較研究する共同体として 1953 年に発足した。世界 182 か国で 11,500 校以上が ASPnet に加盟している。当初から ASPnet はそのネットワークを活用し、国内外の学校と交流し、生徒間・教師間で情報や体験を共有し、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指していた²⁴。

世界の ASPnet にはフラグシップ事業と呼ばれる教師と若者による国際ネットワークが存在する。永田ら (2010: 1-19) によると、次のような事業がある。運河を中心とする 18 か国がつながった「ボルガ河沿岸」、99 か国をオンラインでつなげたことのある「私たちの時代」、バルト海沿岸の 9 か国が始めた「バルト海」、17 か国による「カリブ海」、カリブ海に加えてインド洋や太平洋諸国も含めた「サンドウォッチ」などである。これら事業の開始時には、その学校の所在地とは関係なく外国の UNESCO 国内委員会が出資したり、科学者等の外部専門家が関わったり、国際機関の動向と連動した活動を展開するなど、国際連携が見られた。中には既に活動を終えたプロジェクトがあるが、「バルト海」は 2018 年の段階でもアクティブである。

丸山 (2014) によると「バルト海」プロジェクト (BSP) は、東西冷戦が終わりを迎えようとしていた時期に調整が始まり、東側へのアクセスが可能となった 1989 年に地域プロジェクトとして開始された。その特徴は、環境教育を異文化間学習と結合させ、世界中の他の学校プロジェクトへ影響を与えたことにあった (Swedish National Commission for UNESCO 2005: 14)。当時のバルト海における環境汚染を共通テーマに掲げ、冷戦による政治的イデオロギーの対立の影響を避け、専門家の支援を受けながら、自然環境の保全のため理科教育を中心に現状

21 これらの先行研究で留意すべきは、「主観的ウェルビーイング (subjective well-being: SWB)」の扱いであろう。Eid & Larsen (2008) が示すように、主観ゆえに幸福 (happiness) と同意に扱われることが多く、個人水準の概念であることに注意が必要である (Veenhoven 2008)。

22 ASPnet 加盟校は、かつて日本では UNESCO 協同学校と呼ばれ、今はユネスコスクールと呼ばれる。

23 UNESCO 憲章第 7 条に示す国内協力団体として UNESCO 加盟国が関連する自国の主要な団体などを UNESCO 事業に参加させるために設立。日本では「ユネスコ活動に関する法律」第 5 条にもとづき 1952 年以降、文部科学省 (当初は文部省) 内に設置されている。

24 <http://www.unesco-school.mext.go.jp/aspnet/> (2018/10/31 閲覧)

の把握と解決策の探求を子どもたちが主体的に行った。

BSP は、開始当初から「ボトムアップ戦略」を標榜する運動体として、1992 年開催のリオ・環境サミットに対応する形で持続可能な開発を扱うようになり、2018 年現在も、自然環境の他、多様性と地域性を含む ESD に関連したバルト海沿岸諸国間の教育実践協力ネットワークとなっている。その教育目標では、地元・国・広域レベルにおける自然と社会を包括的に捉えた環境を持続させるための知識と技能を身につけることの他、参加、責任、行動が鍵となる能力として設定されている²⁵。今も続く 3 年に一度の BSP カンファレンスは最初にフィンランドで開催され、その後バルト海を囲んで反時計回りに位置する参加 9 か国が持ち回りで開催している。その他の活動には不定期な教材開発²⁶や、定期刊行物としてのニュースレターおよび Web サイトでの情報共有がある。

3. 研究方法

(1) 研究対象および協力者：BSP カンファレンスとワークショップ参加者

3 年おきに開催される BSP カンファレンスは、本来 2018 年は 9 番目の最後の当番であるロシアでの開催が予定されていたが、ドイツが代わりに開催した。カンファレンスのメインテーマは「グローバル・シティズンシップ」で、これまでの中心テーマに多かった自然環境からは、やや異なる設定であった。カンファレンス日程は 2018 年 9 月 18 日から 21 日までの 4 日間であった²⁷。開催場所は、デンマークとの国境も近い港町キールが最寄りの都市となる、バルト海に面した小さな街ダンプにあるリゾートホテルであった。参加者総数は 326 名で、最大の参加者はドイツからの 113 名であった。通常とは異なりドイツ教員の参加者がその半分以上を占めたが、それ以外の国からは通常どおり引率教員と生徒たちであった。また従来からの BSP 参加国以外にも著者らの参加も認められた²⁸。

現地では 13 のワークショップが並行して開催され、カンファレンス主催者側からの依頼により、著者らは一つのワークショップを「Making Us Sustainable (以下、本 WS)」と題して開催、運営した。本 WS への参加者は下の結果と考察で述べるように、15 名であった。本稿の第一著者は過去 9 年に渡り BSP を訪問調査してきたこともあり、ドイツの国別コーディネーターおよび今回のカンファレンス主催者から調査許可を得ることができた。

(2) 質問紙調査の開発

時間は前後するが、9 月のカンファレンス前となる 2018 年 7 月から、上智大学において本 WS 参加者に対する質問紙の開発を始めた。その質問紙は、上記ウェルビーイングに関わる文献調査の結果をもとに、次の 3 側面に関する質問群によって構成された。第 1 に、物理的側面として回答者本人の健康状態および学習環境についての問を設定した。第 2 に、心理的側面として回答者自身の考えに関する設問を用意した。この側面は本 WS の実施前後で変化をたずね

25 The Baltic Sea Project ホームページ <http://www.b-s-p.org/> (2018/10/31 閲覧)

26 例えば、BSP 参加国で共同開発されたテーマ別学習ガイド (www.b-s-p.org/home/guides/) は英語であるが、学校教師に限らず誰でもダウンロードでき、各言語に翻訳して使えるようになっている。

27 ただし、参加者全員が到着した初日は夕刻に教員だけを対象とした基調講演のみであった。

28 BSP 9 か国の他、著者ら以外には日本代表として上智大学と大阪府立大学のスタディーツアー参加学生の特別参加が、また韓国教育省および高校教員のオブザーバー参加が認められた。

るデザインをとった。というのも、第1側面と次の第3側面は本WSの外部に位置付けられる事実となるためであった。第3に、社会的側面として、家族・友人・教師との関係をたずねる質問群を用意した。ただし、この側面については生徒のみを対象とし、教員の参加者にはBSP活動で重視する内容を問うものとした。

質問紙が一度完成した後、2018年8月10日には上智大学の学生12名と大阪府立大学の学生5名にパイロット調査として回答してもらい、そのフィードバックをもとにドイツで対象となる予定の15から20歳までの生徒にとって内容や英語の分かりにくさなどを精査し、本稿巻末資料のとおり質問紙の最終版を確定した。なお、この質問紙開発の段階では、本WSへの参加者数について一切不明であった。これまでBSPカンファレンス参加者の9割が生徒であり、当時はドイツ担当者から600名規模のカンファレンスとなることが著者らには知らされていた。そのため、参加者数600を13のワークショップ数で割り、本WSにも46名が参加することを予想し、そのうち9割が生徒であると想定し、約40名の回答者が期待された。

(3) ワークショップの展開および質問紙調査の実施

完成した質問紙を現地に持ち込んだ上、第一著者は本WSファシリテーターとなり、第二著者は本WSアシスタントとして関わりながら質問紙調査を行った。本WSの目的は、各参加者が自らの持続可能性を捉えることであった。参加者からは同意を得た上、参与観察および質問紙調査に協力してもらった。本WSは英語で行われ、参加者が英語を理解できない時には、第一著者が表現を変えて説明する、あるいは理解できた者がその母語で手伝うといった、相互作用が比較的多い状態であった。本WSの内容は、大きく3つの段階で展開された。

まず、予備知識を何も共有していない段階で参加者には質問紙に回答してもらい、その後「いかに自分たちを持続可能にするか、いかに自分たちが持続不可能な状態にあるか」という課題意識を共有するため、国際動向や日本の状況などがファシリテーターから説明があった。SDGsの予備知識はある程度共有されていたが、持続可能な開発の定義や歴史的背景、そして今日的意義についてはファシリテーターから講義形式で情報提供された。その時点で既に参加者の一部には本WSの内容が難しいものになるといった表情も見られたが、その後の本WSは常に参加者に問いかけ続け、グループディスカッションを繰り返すものとなった。まず、持続可能な社会や個人と言われて、何を想像するかという問いかけから始まり、自由な発想や発言が促された。そうした流れを作った後、各自が「ライフヒストリー²⁹」を作成する時間を設けた。全員が作図を終えると、異なる国の生徒と成人が混在する形の5名ずつで、3つのグループを形成し、グループ内で各自の自己紹介を兼ねた「ライフヒストリー」で示された人生経験についての情報を共有した。初対面の者同士が互いに話し合える相手と見なすようになった。

第2の段階として、グループディスカッションから一度戻り、全体に対する問いかけがなされた。すなわち、途上国と比べてあらゆる面で恵まれているとされるのが先進国であると考えられがちであるが、私たちが経験する近代教育は、実際には効率性を重視するため、時に学習

29 本研究では質問紙（巻末資料）5頁を用いて、縦軸に前向きな気持ちや幸福の度合いの高低を、横軸では生徒たちは過去7年を、成人には就業してからの人生期間を設定し、各自が振り返ってもらう作図のワークだった。ライフイベントなどを点としてプロットし、最終的に線で繋げて、心情曲線を表現する。

者の多様な学習ニーズに対応できないのではないか、また学習継続の意欲が削がれたり、学習内容の意味を見出せない、または学習者がエンパワーされてないことがあるのではないかという問いかけであった。このあたりから、生徒も学校の不満や自分の趣味の意味などを発言するようになり、教員参加者の中にはドイツの教育理論を皆の前に立ち説明する者や、大きくうなずきながら発言が止まらない者も見られるようになった。こうした日常的な経験を共有し、特に教育成果は誰のために重要か、そして自分たちは持続可能な状態といえるかという点について、再びグループに分かれてディスカッションを行った。

昼休みを挟み、もっとも長いセッションとなった第3段階では、まず昼休みの間に感じたことや思い出したことが共有され、持続可能な開発とは途上国を助けるだけではないこと、自分たちの生活も見直す必要があること、自分たちの考えるウェルビーイングには普遍的な側面と個別の側面があることが指摘された。そして、ある生徒参加者からの提案により、各自の母語を用いてウェルビーイングを表現することになった。まず各自がウェルビーイングだと考えることをカードに母語で記し、5枚ほどのカードを埋めた後、グループの他のメンバーに説明した。その中で共通の部分やユニークな点などを確認し、概念整理を行った。そして、会場に設置されたボード上に貼り付けていった(写真1)。さらには、各国言語やシンボルを合成させて、グループごとにウェルビーイングを意味する新たな言葉を生成した(写真2)。



写真1: 本 WS の様子
(著者ら撮影 2018/9/19)

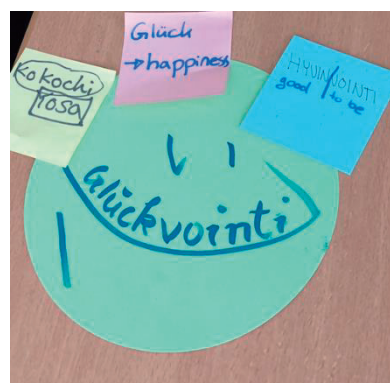


写真2: 「ウェルビーイング」を意味する新造シンボル³⁰

以上の3つの段階を経て、本 WS 終了間際に、質問紙における心理的側面についてのみ再度回答を記入するよう参加者に求めた。カンファレンス最終日には、13 ワークショップの総括発表が用意されていたが、後述するように著者らは参加できず、参加者たちに発表を任せた。

4. 結果と考察

(1) 質問紙調査の結果からみる学習者のウェルビーイング

a) 参加者の背景

上記のように、参加者の中には個人の経験が持続可能性に関係することを本 WS 中に発言した者もいたが、本節では彼ら・彼女らの質問紙への回答をみていく。本 WS への参加者の出身

30 日本語、フィンランド語、ドイツ語を組み合わせた言葉・シンボルという説明がなされた。

国と内訳（人数）などは表1の通りである。年齢層として15から20歳までの生徒・学生（以下、生徒）が7名、社会人が8名であった。社会人のうち40歳以上の教員が7名、20代のリトアニア国別コーディネーター1名であった。BSPの9か国のうち、本WSへの参加者がいなかった国は、デンマーク、スウェーデン³¹、ポーランド、ロシアであった。前述の通り現地に入るまで全体で45名（うち生徒40名）ほどの参加を見込んで開発された質問紙であったが、小さい参加者数となった。ただし、本WSが特に不人気だったわけではなく、並行して開催された他の12ワークショップにおいて参加者も同規模であったり、当日キャンセルの者も多かったことが、現地の参加者リストからも読み取れた。

	生徒	成人
ドイツ	2	5*
日本	2	1
フィンランド	1	0
エストニア	1**	0
ラトビア	1**	0
リトアニア	0	2***
計	7	8

* 男性2名を含む

** 男子1名

*** 国担当者1名を含む

表1：本WSへの参加者（n=15）

すべての回答結果を記すことはできないが、15名（生徒7名）からの回答から、本WSへの参加者の特徴はいくつかみられた。まず、自身の性格として「自分は饒舌である」回答した者は15人中8名であったが、本WSグループディスカッションでは黙り込む参加者はいなかった。また、家庭背景を問う自宅の書籍数は、100冊以下が6名（40%）、101から500冊までが8名（53.3%）、501冊以上が1名（6.7%）であった。また、15名全員がスマートフォンを所有し、その利用目的の順番について上位3つは、メッセージ交換が14名（93.3%）の最多で、次いでニュース購読や情報収集が11名（73.3%）、その次はe-mailが7名（46.7%）だった。学校の宿題や仕事については4名（26.7%）だったので、スマートフォンの利用目的としては優先順位が低かったといえよう。インターネット利用について、平日は1,2時間が最多（6名）で、週末は3時間から5時間が最多（7名）という回答だった。BSPは学校行事以外の活動として扱われる国が多いことから、また蔵書数、スマートフォン所有、インターネット利用だけみると本WS参加者たちの社会経済的背景は比較的高いことが想像される。

31 ただし、登録段階では、スウェーデンからも2名の参加者が予定されていた。

身体や健康、また学習環境などをたずねた物理的側面に関する設問に対して 10 から 15 名が良い状態を回答したため、ウェルビーイングに関して物理的な側面については課題を抱えている者が少ないことが示唆された。また、生徒 7 名のみを対象に社会的側面のうち、友人および教師との関係をたずねる設問に対しても、初対面の著者らに対する回答の社会的望ましさが想定されるが、問題となる否定的な回答は全員なかった。ただし、家庭における関係性にはややばらつきが見られた（表 2）。

あなたの家庭で保護者は次のことを どれぐらい行っていますか（数字は質問番号）	ほぼ 無い	年に 数回	月に 一度	月に 数回	週に 幾度	無回 答
41 学校でうまくやっているかを話し合う	0	1	1	2	3	0
42 メインとなる食事を一緒に食べる	0	0	1	1	5	0
43 学校を卒業することが重要であることを話す	0	1	2	1	3	0
44 学校で他の人とうまくやっているかを尋ねる	0	2	1	1	2	1
45 将来の教育について話す	0	1	1	2	3	0
46 あなたと、ただ喋る	0	0	0	0	7	0
47 学校で抱える問題について話す	0	1	2	2	2	0
48 良い成績を取ることを応援する	0	0	2	2	3	0
49 学校で勉強することに興味を持つ	0	0	2	2	3	0
50 その日、学校で学んだことをたずねる	0	0	0	1	6	0

表 2：本 WS 実施前後の「社会的側面」家族項目への回答（n=7）

b) 本 WS 前後における学習者のウェルビーイングの変化

本研究では、心理的側面について本 WS の前後で同じ設問に回答を求めた。その結果、いくつかの項目では有意に変化が見られた（表 3）。いずれの項目においても、本 WS が展開される前から前向きな回答が多い（53.3%～80%）ことと、事後において前向きな回答が増加したことがわかる。特に、「前向きなプレッシャーと後ろ向きのストレスを分別できる」、「多くのことが私を邪魔する」、「前向きなプレッシャーと後ろ向きのストレスを分別できる」、そして「日常生活の問題があると、解決策を見つけることができる」の 4 つについては、本 WS 後にはより強い変化がみられた。

設問項目（数字は質問番号）	事前 (%)	事後 (%)
15 私は、自分の自尊心を維持できる	80.0	86.7
16 私は、自分の貢献に対して感謝されているように感じる	73.3	80.0
17 多くのことが私を邪魔する（反転項目）*	46.7	60.0
18 私は何がストレスの原因となり、それに対して何をすべきか知っている*	60.0	73.3
19 私は、前向きなプレッシャーと後ろ向きのストレスを分別できる**	60.0	93.3
20 私は、日常生活の問題があると、解決策を見つけることができる*	66.7	93.3
		* $p < .05$
		** $p < .01$

表 3：本 WS 実施前後の「心理的側面」項目への回答（n=15）

以上の回答から、参加者数は小さかったものの、社会経済的背景は比較的良く、ウェルビーイングの物理的な側面には大きな課題性が見当たらないこと、しかし社会的側面の家族の相互作用についてはわずかにばらつきがあること、そして心理的側面においては本 WS 後には前向きな回答が増えたことがわかった。これは、本 WS のディスカッションでウェルビーイングを各自が自分の持続可能性として検討した影響だと考えられる。

c) 自由記述項目の結果

数値の上では参加者のウェルビーイングの向上がみられたが、それは本人にとってどのような意味があったのか。質問紙の自由記述欄では、各自が本 WS をふりかえる機会を用意した。その中から変化の説明につながる可能性を持つ参加者の記述となる「(表 3 の) 設問に対する自分の回答で、何か変化に気づきましたか」に対する回答を以下いくつか記す。

「日常生活の問題があると、解決策を見つけることができる」への私の回答は、良くなった。本 WS の最初では厄介者のように自分を思っていたが、休憩を挟んで他の人ほど知識は無いかもしれないけど、若者の視点で発言すれば良いと思うようになった (フィンランド生徒)

自分では饒舌ではないと回答した 15 歳の女子生徒は、他にフィンランド人参加者がおらず、大人が半分を占める本 WS で初めての人たちとグループディスカッションを行った。ドイツ人の教員たちが専門知識も披露するグループでは戸惑いながらも、自分でできることを考えたに違いない。なぜなら「ウェルビーイング」の新語 (写真 2) を生成する時、フィンランド語に組み込むことによってグループワークへ大きな貢献をしたためである。

恐らく本 WS は私をより幸せにしてくれ、今は私の世界は光に照らされているように思える。当初は多くのストレスにさらされていたが、その原因が見えるようだ。ディスカッションをとおして、良いプレッシャーと悪いストレスを判別でき、ストレスを別の角度から見るインスピレーションを得ることができた (リトアニア国別コーディネーター)

BSP 参加国には、国別コーディネーターがいる。大学を卒業したばかりの彼女にとって、ベテラン教師や BSP 第一世代と BSP の将来を議論するやり取りには、少なからぬプレッシャーを感じていたに違いない。本 WS では BSP 自体を題材に議論することは無かったが、議論の内容は常に自分の周辺世界が自分にとってどういう意味があるのかを問いかけるものであったことから、本人にとっては BSP の課題を想像しながら議論に参加していたことが想像される。

自分で回答してみて、自分のメンタルヘルスやストレス度の高い状況で、いかに冷静でいるべきかに、より気づくことになった (ドイツ生徒)

質問紙を振り返ってみて、2 つの変化がみえる。それらは理にかなっている。なぜなら、午前中に比べて今の私はより幸せだから (ドイツ教師)

ドイツの16歳の生徒は、詳細は記していなかったが、状況判断と自分の心理的な反応について認知できることを述べている。ウェルビーイングとは、ストレスの無い状態を指すのではなく、自分自身をいかに状況に対応させ、振り回されない状態となるかも意味する³²。55歳のベテラン教師は「2つの変化」については何も記していなかったが、得るものがあったようである。本人は2000年代に横浜のドイツ人学校に勤務したことがあり、日本人の振る舞いについても知識を持っており、本WS後に別の参加者に「日本人の良いところが発揮されたワークショップだった」と感想を述べていたことが、著者に間接的に知らされた。

多くの日本人は、ものごとを深く、深刻に考えがちだ。でもそれはよくない。いかなる解決策も作り出さないからだ（日本生徒）

英語での議論を自分では得意としないと記した20歳の日本人生徒は、本WSと質問紙内容を振り返り、上のように記した。日本社会のことを指しているようでもあり、自分自身のことを思い起こしながら記したようにも読める。上記の参加者たちのように、簡単に幸せな気持ちになったわけでもなく、本WSは本人にとって考える機会を与えることになったともいえよう。

他の設問への回答でも類似のものが見られたが、共通するのは「自分を分析するのにもっと時間が必要（リトアニア教師）」や「学校では一度も議論したことがなかったが、最高の経験でした（ドイツ生徒）」などのように、生徒も成人も同様に自分を振り返ることができた点であった。これらは、学習者のニーズや学習環境に応じて柔軟に教育を設定するノンフォーマル教育に大きな可能性が秘められていると丸山（2016）が指摘するように、学校という限られた時空では個人の持続可能性を扱いきれない限界も示唆する回答である。また、「言語の違いによる困難は、本当に問題ではない（ドイツ教師）」という感想も記され、参加者全員にとって外国語である英語を共通言語としたものの、ウェルビーイングを自分の母語で表現する機会があったことから、英語のグローバルな影響についても相対化することができたといえよう。

（2）ワークショップを完成させた参加者

これらの分析以上に、本WSの検証を意味あるものにするのは、議論と気持ちの変化だけで終わったわけではない点である。ファシリテーターを務めた著者らが存在しない状態で、参加者自らが行動を起こしたことで、本WSが完成の域に達したといえる事態が生じた。

カンファレンス最終日におけるワークショップ全体の報告セッションを前に、著者らは帰国する必要があった³³。通常ワークショップでは、双方向的な参加型の学びを大切にするため、ファシリテーターが参加者の興味や意欲を引き出しながら場を展開していく（中野2000:133）。ファシリテーターが進めた本WSの最後には写真1や2で示したような全員が関わって最終作品を作り上げたものの、それを最終日にカンファレンス全体に報告する機会を失ったことで中途半

32 これは、Senのケイパビリティアプローチから説明が可能である。

33 ファシリテーターとなった第一著者は上智大学の公式スタディツアー参加学生を引率し、同学の学事カレンダーに従って、春学期日程の最終日には現地を離れて帰国している必要があった。そのため、カンファレンス最終日にはファシリテーターを務めることができなかった。

端な終わり方を迎えることが予想された。

しかし、ファシリテーターが特別な指示を出していなかったにも関わらず、参加者たちは自身の判断で最終報告セッションにおいて、「Making Yourself and the Society Sustainable」と描き、その下に他のワークショップ参加者たちにもそれぞれの母語でウェルビーイングについて、文字やシンボルで表現させた(写真3と4)。注目すべきは、本WSではタイトル通り「Make Us Sustainable」と参加者自身を焦点化していたのにも関わらず、参加者たちは自身の表現として「Yourself and the Society」と書き換えた点である。これは参加者が「自分たちはウェルビーイング状態を担保できた、次はあなたの番だ。そして社会を持続可能にしよう」という意思を持ったと読み取れ、「上から与えられた」正解ではなく、自ら行動を起こすことができたことを意味する。

ファシリテーター不在の場合であっても、参加者自身が主体的に行動を起こし、作品の完成度合いをさらに高めた。この様子を、複数の参加者がメールで帰国していた著者に報告してきた。ドイツの教員参加者は本研究の結果を共有して欲しいと連絡して来たり、他のドイツ教員はメールで「自分の状態を振り返り、とても元気をもらった」とも伝えてきた。エストニアの男子高校生はエストニア国別コーディネーターに本WSの内容が多岐にわたるようで実は自分のことを扱っていたと感想を漏らしていたと、そのコーディネーターから著者に伝えられた³⁴。



写真3：自主的に作成するワーク



写真4：完成した各国言語による作品
(ワークショップ参加者撮影 2018/9/21)

(3) BSP にみる教育プログラムの継続性

最後に、こうした学習者の参画を担保する教育活動を支えるBSPの継続性についても分析が必要である。歴史的にBSPの教育活動は、バルト海の環境汚染への対応から始まり、カンファレンス以外のBSP活動では、これまで自然環境に関する教育実践や教材開発がなされてきた。そうした歴史からみると、今回のカンファレンスのテーマが「グローバル・シティズンシップ」であったことは、大きな変化である。

この変化を引き起こしたのは、次の2つの要因が考えられる。ひとつは、BSPを立ち上げた第一世代が最近5年ほど特に話題にすることのあった世代交代が実現したためである。バルト海の環境汚染はほぼ解消された現在、自然環境と異文化教育などを接合してきた第一世代の尽

34 蛇足であるが、このようなワークショップの展開も参加者からの感想も想像していなかった著者らは、彼ら・彼女らからの反応にエンパワーされたのも事実であった。

力が、SDG 第 4 目標に扱われる今日的課題により焦点を当てる形で次の世代に継承されたことになる。また、BSP 活動に関わった高校生たちが教師として戻ってきている時期でもある。著者らがドイツに入国する前に滞在したエストニアにおいては、BSP の学習活動に参加した生徒が高校を卒業して年齢的に参加できず寂しいと漏らしていたほど、BSP 活動の人気は高い。これらのことから、BSP 教育プログラムの前向きな継続性が指摘できる。

しかし、もう一つの背景要因としては、投入できる資源についての現実的な要因が挙げられる。それは、BSP 活動の継続において各国 UNESCO 国内委員会が予算や人員の調整を求めているためである。BSP の始まりは、政府主導のトップダウンではなく、学校教師が自主的に求めたボトムアップ型の運動からであった。エストニアおよびドイツの国担当者に個別に聞き取り³⁵すると、各国の教育省および UNESCO 国内委員会からは予算上の制限から、別扱いされていた BSP 以外の ASPnet と共同で活動を展開してほしいこと、BSP のみで開催していたカンファレンスもドイツ全国教員研修会と合同で行なってほしいことなどが要請されていた。これらのことから、確かに BSP は教育プログラムとしての継続性を維持できたが、それは従来の形のままではないことが指摘できる。

さらに、今後の継続性については、不透明な部分も今回の観察から分かった。当番制で BSP 活動の全体調整を担当していた国は、フィンランドからバルト海を一周し、今回で最後の当番であるロシアから最初のフィンランドへ受け継がれることになっていた。しかし、ロシア国内での調整がつかなかったようで、国別コーディネーターが不在の上、カンファレンスはドイツで開催された。今後の動向によっては、ロシア不在で BSP 活動が続く可能性もある。また、世代交代には成功しているが、国内調整に困難を抱えていることが想像される国も見られた。リトアニアからの参加は 1 校のみと極めて限定的で、またベテラン教師が担うことの多い国別コーディネーターも大学を卒業したばかりの若手が今回は担っていたことから、何らかの国内事情が想像される。今回のカンファレンスは無事に終えることができたが、次回 2021 年のフィンランドがホストする BSP カンファレンスがどのような形になるか、不透明である。しかしながら、2019 年は BSP の 30 周年行事とカンファレンスを開催する企画も進行中のようで、3 年に 1 回ではなく、より細かな単位で何らかの行事を設定することにより、活性化する可能性も秘めている。日本の ASPnet でも ESD に熱心な校長が転勤すると活動が滞る事例も少なくないことから、教育プログラムの継続性についての検証は引き続き求められる。

5. おわりに

本稿では、グローバルに課題を設定する SDGs の重要性を認めつつも、それを具体的な教育プログラムに転化し、継続してきた「バルト海」プロジェクト (BSP) を事例としてみてきた。UNESCO が示す ESD 実践が見られる BSP のプログラムへ参加する学習者は、そうした国際イニシアチブを他人の課題としてではなく、自らの課題と関連させ、他者へ行動を促すことになったことが本研究では確認できた。これは、持続可能性を扱う教育プログラムとは、誰か他人が作ったパッケージ教材をこなし、それから得られた知識を確認して終わる作業とは異なることが示唆される。

35 2018/9/20 実施。

今回の BSP カンファレンスにおける本 WS 参加者は、何かに役立つ知識や新しい知識は得られなかったかもしれないが、自分たちの日常におけるウェルビーイングが自分と社会の持続可能性につながるという理解を議論と自分たちの持つ言語や文化による表現を通して共有した。本 WS における質問紙への回答結果や著者らの観察、そして参加者からの事後報告から、参加者個人がウェルビーイングを高めたといえるだろう。特に、全体報告の責任者であるファシリテーターが居なくなったからといってそのままで終わるのではなく、作品を自ら発展させ、それに他の参加者も加わるよう誘うなど、行動に移すことができた。その手法は、各自の母語や文化を表現することで誰もが参加できること、つまり SDGs の持つ「誰一人として取り残さない」ことを暗示させるものでもあった。また、そうした学習活動を支えるには、継続的な教育プログラムが求められ、その形態としてはボトムアップ型かつ新たな課題にも対応する柔軟性を伴う必要が挙げられる。

最後になったが、本研究の限界についても触れておきたい。著者らは本 WS を主催しながら、本研究を行った。このことから、参加者のウェルビーイングを向上させるために意図的な介入が存在した可能性は否めない。しかし、多国籍で年齢幅もある初対面の教育関係者および生徒を相手に、英語で参加者に問いかけ続けるワークショップを展開している最中には、そのような試みを意識する余裕は無かったのも事実である。質問紙調査については、当初は 40 名の生徒と 5 名程度の教員を対象とすることで質問紙を現地に持ち込んだ。実際の回答者数は 15 名で、その半分以上が成人であった。そのため、本研究で示した回答結果を一般化することは困難であることは自明である。また、本研究の射程を超えるため、全体の BSP 活動やワークショップの内容の評価、あるいは批判的検証はできなかった。これらは今後の課題である。

謝辞

BSP 企画者と協力者の皆様にその忍耐強い継続への努力に対して敬意とともに、また本研究への協力に対して心から感謝申し上げます。なお、本研究は科研費（17K04577、18H00991、16H03774）による研究成果の一部である。

【参考文献】

- 黒田一雄（2016）『『教育のグローバルガバナンスと開発』に寄せて』『国際開発研究』25（1/2）：1-4.
- 田中治彦・三宅隆史・湯本浩之（2016）『SDGs と開発教育—持続可能な開発目標のための学び』学文社
- 中野民夫（2001）『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波書店
- 永田佳之編（2010）『東アジアにおける「持続可能な開発のための教育」の学校ネットワーク構築に向けた研究』科研費（B）海外学術中間報告書（課題番号 20402062）
- ノディングズ・ネル（1992=2007）『学校におけるケアの挑戦』（佐藤学監訳）ゆみる出版
- 丸山英樹（2014）「ユネスコスクール・ネットワークに見られる持続可能性：バルト海プロジェクトと大阪 ASPnet を事例に」『国立教育政策研究所紀要』143: 183-195.

- 丸山英樹編 (2016) 『ノンフォーマル教育に関する国際比較研究』 科研費 (B) 海外学術「学習者のウェルビーイングに資するノンフォーマル教育の国際比較研究」報告書 (課題番号 25301053)
- 吉田和浩 (2016) 「SDGs 時代における教育グローバル・ガバナンスの特徴と課題」『国際開発研究』 25 (1/2) : 5-16.
- 米原あき (2016) 「Well-being 概念とノンフォーマル教育」丸山編, *op. cit.*, pp.14-19.
- Cowie, H., Boardman, C., Dawkins, J. & Jennifer, D. (2006) . *Emotional Health and Well-Being: a Practical Guide for Schools*, Paul Chapman Publishing.
- Eid, M. & Larsen, R.J. eds. (2008) . *The Science of Subjective Well-Being*, NY: the Guilford Press.
- Krueger, A.B. ed. (2009) . *Measuring the Subjective Well-Being of Nations: National Accounts of Time Use and Well-Being*, the University of Chicago Press.
- Holmes, E. (2005) . *Teacher Well-Being: Looking After Yourself and Your Career in the Classroom*, Routledge.
- OECD (2011) . *How's Life? Measuring Well-Being*, Paris: OECD Publishing.
- OECD (2017a) . *How's Life? 2017 Measuring Well-Being*, Paris: OECD Publishing.
- OECD (2017b) . *PISA 2015 Results (Volume III): Students' Well-Being*, Paris: OECD Publishing.
- Sen, A. (1999) . *Commodities and Capabilities*. New Delhi: Oxford University Press.
- Sen, A. (2000) . *Development as Freedom*. NY: Anchor books.
- Swedish National Commission for UNESCO. (2005) . *Baltic Sea Project 15 Years*. Stockholm: Author.
- Veenhoven, R. (2008) . Sociological Theories of Subjective Well-Being, In Eid & Larsen, *op. cit.* pp.44-61.
- Vleminckx, K. & Smeeding, T.M. eds. (2003) . *Child Well-Being, Child Poverty and Child Policy in Modern Nations*, Polity Press.
- White, J. (2011) . *Exploring Well-Being in Schools*, NY: Routledge.
- World Commission on Environment and Development (1987) . *Our Common Future*. Oxford University Press.

(巻末資料) 使用した質問紙

20180906
No. _____

Questionnaire about your attitude toward well-being

The workshop "Making Us Sustainable" is interactive and focuses on self-reflection.

Important note:

- When you see the box (), tick one from the below items.
- When you see the blank underline (), write **letters or numbers**.
- When you cannot understand the question, ask the coordinator for the details.
- When you do not want to answer the question, leave it and go to the next.

Correspondence of the study:

Hideki Maruyama, Ph.D.
Associate Professor, Institute of Global Concern, Sophia University
hideki_@sophia.ac.jp +81-3-3238-3380
7-1 Kioicho, Tokyo, Japan, 102-8554.
www.facebook.com/Dear-Hideki

Do you agree to cooperate with following research?

This questionnaire asks you about the state and changes in your well-being in past times and today during the workshop. The purposes of this study are to compare backgrounds for well-being across countries and individuals, to find whether the workshop influences its level, and to share the results with participants of the workshop. The results would be also used for a research of well-being, conducted by Prof. Maruyama. We would like you to cooperate with the research.

- ☐ Yes, I understand and agree.
☐ No, I do not agree but stop answering more questions.

→ Go to Question 1.
→ Stop here.

1. Where are you from? (Choose the main country in which you go to school.)

- ☐ Denmark ☐ Estonia ☐ Finland ☐ Germany ☐ Japan
☐ Latvia ☐ Lithuania ☐ Poland ☐ Russia ☐ Sweden

2. You are...

- ☐ Female ☐ Male ☐ Rather not say

3. You are _____ years old.

4. You are a ...

- ☐ Student ☐ Teacher ☐ National Coordinator of BSP
☐ Other (_____)

5. You are ...

- ☐ very talkative ☐ talkative ☐ quiet ☐ very quiet

6. How many books are there in your home?

(There are usually about 15 books per foot of shelving. Do not include magazines, newspapers, or your schoolbooks.)

- ☐ 0-10 books, ☐ 11-25, ☐ 26-100, ☐ 101-200, ☐ 201-500, ☐ More than 500 books

1

Use a black pen.

Thinking about your daily life, to what extent do you agree with the following statements?

7. I get enough sleep on a typical weekday.

- ☐ (a) Strongly agree ☐ (b) Agree ☐ (c) Disagree ☐ (d) Strongly disagree

8. I look after myself by taking care of my health every day.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

9. I take part in some moderate or vigorous (active) physical activity such as walking and sports in or out of school.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

10. I have a pleasant studying or working environment that is safe and secure.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

11. I have many friends to spend time with me.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

12. I have one or more good friend(s) or someone to talk about anything.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

13. How long do you use the Internet on a typical weekday?

- ☐ less than 1 hour ☐ between 1 & 2 hrs ☐ between 3 & 5 hrs ☐ more than 6 hrs

14. How long do you use the Internet on a typical weekend?

- ☐ less than 1 hour ☐ between 1 & 2 hrs ☐ between 3 & 5 hrs ☐ more than 6 hrs

15. I can maintain my self-esteem.

- ☐ (a) Strongly agree ☐ (b) Agree ☐ (c) Disagree ☐ (d) Strongly disagree

16. I feel like I receive thanks from others for my contribution.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

17. A lot of things seem to bother me.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

18. I recognize what causes stress and know what to do about them.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

19. I can distinguish between positive pressure and negative stress.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

20. I can find a solution when I have a trouble in daily life.

- ☐ (a) ☐ (b) ☐ (c) ☐ (d)

21. Please sort the following activities in the order of favor (Put 1 to the most favorite thing to do and 5 to the least):

- () Reading books
() Watching videos alone
() Talking with your friends by phone or internet
() Going out with your friends
() Others ()

2

Thinking about your school, to what extent do you agree with the following statements?

22. I feel like an outsider (or left out of things) at school.
☐ (a) Strongly agree --- ☐ (b) Agree --- ☐ (c) Disagree --- ☐ (d) Strongly disagree

23. I make friends easily at school.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

24. I feel like I belong at school.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

25. I feel awkward and out of place in my school.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

26. Other students seem to like me.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

27. Other students seem to have more fun than me.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

28. I look after my friends.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

29. I make an effort to strengthen teamwork, collaboration, and mutual respect.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

30. I get along well with most of my teachers.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

31. Most of my teachers are interested in my well-being.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

32. If I need extra help, I will receive it from my teachers.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

33. Most of my teachers listen to what I have to say.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

34. Most of my teachers treat me fairly.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

35. The teachers show an interest in every student's learning.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

36. The teachers give students an opportunity to express opinions.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

37. Our teachers expect us to work hard.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

38. Our teachers encourage students to do their best work.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

39. Our teachers expect us to do our homework on time.
☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d)

40. Please sort the following people in the order of importance (Put 1 to the most important and 5 to the least important):

() Teacher(s)
 () Friend(s)
 () Romantic partner
 () Parent(s)
 () Others (e.g. brothers, sisters) _____

In general, how often do your parents or someone in your family do the following things with you?

41. Discuss how well you are doing at school.

☐ (a) Never or hardly ever ☐ (b) A few times a year ☐ (c) About once a month ☐ (d) Several times a month ☐ (e) Several times a week

42. Eat <the main meal> with you.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

43. Talk to you about the importance of completing your school.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

44. Ask you about how well you are getting along with other students at school.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

45. Talk to you about your future education.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

46. Spend time just talking with you.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

47. Talk to you about any problems you might have at school.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

48. Encourage you to get good <grades>.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

49. Take an interest in what you are learning at school.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

50. Ask you what you did in school that day.

☐ (a) --- ☐ (b) --- ☐ (c) --- ☐ (d) --- ☐ (e)

51. Do you have your own smartphone, which can access the internet?

☐ Yes → Go to the next Q.

☐ No → Stop here.

52. What are the main use of your smartphone? (Put 1 to the most frequent use and 6 to the least use)

() Messages with your friends

() News and information

() E-mail

() Homework or school work

() Pictures and drawing

() Others () _____

End of questions now.

Questionnaire after the workshop

Let us go back to the box questions 15 to 20, and check by a different color.

1. What did you find from your new answers? Write about them if you found any:

2. Write about well-being in the group discussion (Country/Culture):

3. Write about well-being in the group discussion (Personal):

4. What is your conclusion in physical conditions?

5. How about psychological aspect?

6. How about social relationships?

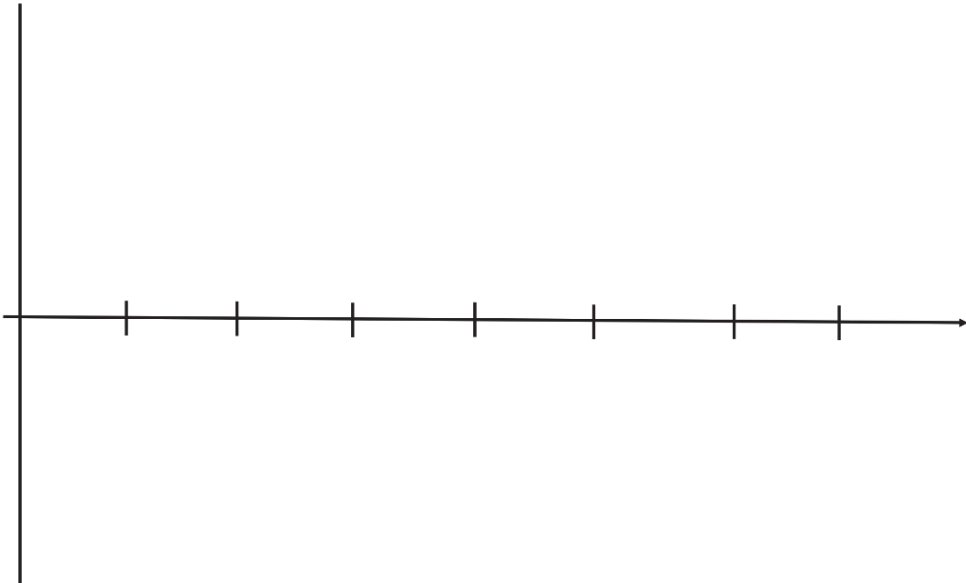
7. Write your comments on the workshop, if any.

For teachers:

8. Which of the following perspectives/dispositions are important in BSP activities for you students? (Please choose up to four items)

- ☐ Joy of Learning; ☐ Co-operation; ☐ Empathy; ☐ Equality; ☐ Justice;
- ☐ Mutual Understanding; ☐ Norm; ☐ Participation; ☐ Self-reflection
- ☐ Respect; ☐ Tolerance; ☐ Trust; ☐ Value;
- ☐ Others (_____)

Thank you so much for answering!



丸山 英樹（上智大学グローバル教育センター准教授）

齋藤 有香（上智大学総合グローバル学部 4 年）

査読審査後掲載決定（受理日 2018 年 10 月 31 日）